

## 2学期と2021年が終わります。

9月1日に始まった2学期も今日で終了となります。9月当初は新型コロナウイルスが再拡大して、緊急事態宣言が発出されているなかで離任式・始業式が行われました。この時、校長先生は、始業式の式辞で「各自が責任を持ってコロナ対策を行わなければ、授業や部活動、学校行事などすべての学校運営は停止してしまいます。他人事ではないです。よろしくお願いします。」とおっしゃいました。

新型コロナウイルスがまだまだ終息していないとはいえ、三木北高生全員の協力のおかげで本校ではクラスターも発生することなく無事に授業や学校行事を行うことができました。それでは2学期を振り返ってみましょう。

### 離任式（9月1日）

藤原寿夫先生は、三木北高生に対して「三木北高校生は、あいさつをすれば返してくれる生徒が多く良い生徒だと思います。しかし、自分から挨拶をする生徒は少ないですね。それはもしかしたら『どうせ俺（私）なんて』とっていませんか。」というエールと課題の克服を最後の言葉として述べられました。

2学期を通じて朝の立ち番や廊下や階段ですれ違う時、自分から積極的に挨拶してくれる生徒が増えたように思います。



### 体育大会（10月6日）

9月29日・30日に予定されていた体育大会は、日程を変更し規模も縮小しながらも実施することができました。残念ながら今年も無観客での実施となりました。観覧を希望される保護者の方が多い三木北高校の体育大会ですが、保護者の方々には、無観客の実施をご理解いただきました。本当にありがとうございました。

大会当日は、3年4組体育委員の石田直史君の「宣誓 新型コロナウイルスによる様々な制約がある中、こうして無事に体育大会を開催できる今日この日、私たち生徒一同は、心を燃やし、猪突猛進をこの胸に、クラス丸となって総合優勝を目指すことを誓います！」の選手宣誓に始まり、各リレー競技やトラック競技では熱戦が繰り広げられました。

また、ラケットリレーでは速さだけでなくバランスやテクニックも必要で、上手くできる人やなかなか上手いかずに、ラケットから落ちたボールを一生懸命に集めてリスタートする人など、色々な場面があり盛り上がりました。さらに学年クラス対抗の綱引きは見ているこちら側が思わず力が入ってしまう熱戦が繰り広げられましたね。新しい取組として各クラスで応援旗を作成し、応援することは体育大会の新しい風景となりました。



### 芸術鑑賞会（10月22日）

今年度の芸術鑑賞会は、和太鼓奏者の溝端健太さんをお迎えして実施されました。「緊急事態宣言は解除されたものの、体育館に全校生を集めて実施するのは、大丈夫なんだろうか」と思いましたが、十分に換気を行い、マスク着用で私語を慎むことで実施しました。最初はどんな演奏をされるのだろうと興味を持って見ていた生徒を迫力のある演奏で魅了し、軽妙なトークで和ませてくれました。後半は9名の生徒代表が体育館のステージに登壇して一緒に演奏しました。登壇してくれた3年生は溝端さんが望む以上のパフォーマンスを披露してくれ、大爆笑を誘いました。

そして最後は、三木北高校の校歌の和太鼓演奏でその迫力に、生徒・職員一同が圧倒されました。本校卒業生の2人の先生は大変感動していました。皆さんはどうだったでしょうか。

鑑賞会が終わった後、溝端さんと少しお話ししたのですが、「3年生には本当に感謝しています。こちらが望んでいたこと以上のことをしてくれて、ありがとうございました」とおっしゃいました。「こちらこそ、本当に感動しました。特に校歌はOBの先生が大変喜んでました」とお伝えしました。本当に素晴らしい芸術鑑賞会となりました。

### ～感想～【抜粋】

- ① 自分の好きな事や夢中になっているものの素晴らしさをたくさんの人に伝えて、全力で太鼓を演奏しているのが素敵だなと強く思いました。
- ② 生で見る和太鼓演奏は迫力があり、とても印象的でした。コロナ禍ではリモートが多く、その分直接演奏を聞くことがなかったのでとても新鮮でした。（中略）最後に、自分の和太鼓に興味があったので、機会があれば自分でも打ってみたいです。
- ③ 三木北高校の校歌を使って演奏するところがとても良かったです。歌う時、力強く歌ってカッコいいと思い、また腕の筋肉も凄くいいと思いました。溝端さんのおかげで中学校の時に太鼓やりたい欲が消えたのが少し戻った気がします。



校歌演奏

### 大事なことはスタート地点に立つこと

大学生の頃、私はフルマラソンへの出場を申し込みました。大会が近づくにつれだんだんと気持ちが向かなくなり、練習をやめてしまいました。未知の世界に挑戦することへの不安に負け、逃げてしまったのです。しかし、大会の1週間前になり、出場することを決断しました。そのきっかけは、「自分を変えたい」と思ったことでした。

いろいろなことから逃げていた自分が嫌になり、「自分と戦えば何かが見えるかも。何かが変わるかも。」と考えた私は、ほとんど練習もせずに、履き古したテニスシューズを履いて、気合だけを武器に大会に臨みました。

制限タイムは5時間。時速10kmで走れば完走できる計算でした。20km地点、景色を見る余裕あり。30km地点、まだ時速10kmをキープ。ところが35km地点、一気にペースダウン。40km地点、エネルギーが枯渇し、足が動かない。残りの2.195kmは、走っても走っても前に進まない。でも、進むしかない。正に、自分との闘いでした。結果は、なんとか5時間以内に完走。今でもゴールしたときの爽快感は鮮明に覚えています。確かに、自分を変えるきっかけを掴んだ瞬間でした。

完走するために必要だったもの、それはただ、結果を恐れずに「スタート地点に立つこと」でした。大事なことは結果ではなく過程です。スタート地点に立ちさえすれば、たとえ思うような結果が得られなくても、何かを掴めるのです。思うような結果が得られた時には自信、というおまけがついてくる。思うような結果が得られない時は、次の目標への糧を手に入れた、と思えばよい。とにかく、大事なことは恐れずに『スタート地点に立つこと』なのです。

1年2組担任 久松 若菜先生